

1. プリムの祭り

3月24日の日没からプリムの祭りが始まり、シナゴグではエステル記が読まれ、ユダヤ人の絶滅を図ったハマーンという名が読まれる度にラアシャン（回してガラガラと大きな音を立てるもの）が、ガラガラと音をならす。メシアニック・ジューの会衆でもプリムの集会が持たれるところがあり、同じように神の救いのみ業を覚えて、ラアシャンが勢いよく鳴らされる。私の集う集会でも、まず、エステル記が朗読され、その後、エステル記を題材にした子供たちの劇が行われた。そして、持ち寄りの料理に舌鼓を打ちながら、楽しく時が流れていった。

翌日の3月25日の金曜日には、イスラエルの各地でプリムのパレード（アドロヤダー）が繰り広げられた。今年は、和平米の高まりもあって、治安の恐れも薄れ多くの人々が街に繰り出した。歌と踊り、様々な仮装、それに山車（だし）が引かれて通りを練り歩く。

27日の日曜日まで、通りに仮装した人々の姿が目につく。そして、27日には、エルサレムのベン・イエフダ通り（歩行者天国）がエステル記のペルシャをテーマに飾られた。様々な出店が並び、シオン広場ではエステル記の劇が演じられた。



2. ぎりぎりの折衝

2005年度の予算案をめぐる、ぎりぎりの折衝が繰り広げられている。3月末までに予算案が可決しない場合、シャロン政権は倒れ、総選挙に突入することになる。そうした場合、撤退案も政権崩壊と共に葬られる可能性が出てくる。

その予算案の投票において鍵を握るのは、連立政権から離脱した超世俗派のシヌイ党である。自党において13人の議員が撤退案に反対しており、予算案においても反対票を投じることを表明している。それゆえに過半数を越えるためにはどうしても15議席を持つ第3政党のシヌイの賛成票が不可欠となる。

統一トーラーユダヤ教党（7議席）を連立政権に加え、予算案のサポートを得るために、2億9千万シェケル（約71億円）を同党の予算請求に割り当てた。しかし、結果的には反宗教で超世俗派のシヌイ党がその動きに反目して、離党する結果となった。だが、シヌイ党は、シャロンの撤退案の推進には党外からでも支援する構えで、予算案の否決に続く国会解散総選挙は避けたいところでもある。シャロンとシヌイ党との折衝の結果、シャロンは、シヌイ党が要求した7億シェケル（約170億円）の予算割り当てを呑み、予算案への賛成をとりつけた（ただし、統一トーラーユダヤ教党への予算割り当て分については賛成票を投じない）。

3. 撤退案に対する国民投票の是非

予算案の投票に先だって、一つの山場となる撤退案に対する国民投票の是非を問う決議が行われた。シャロン首相は、国民投票を行わず、国会の決議によって、撤退案を進めて行くことを強く求めている。また、連合の労働党は、リクードが国民投票に賛成するなら離党すると脅しをかけている。シャロン首相のリクード党内では、13人の反動分子はもちろんのこと、ネタヌヤフー蔵相、シャローム外相、リモール教育相なども国民投票に賛成しており、どれだけのリクード議員が彼らになびくかが不明であり、その投票の行方が注目されていた。もしも、国民投票に訴えることが可決されれば、労働党が連合から離脱して、予算案も否決に終わることになり、解散総選挙は必至となることである。

宗教等のシャス党の党首は、国民投票に賛成の姿勢を示しているが、霊的指導者であるオバデア・ヨセフは、国民投票にはいかなることにしても絶対反対の姿勢を貫いている。しかし、この撤退案に関する国民投票にだけは、妥協するようとの説得が、色々な方向から進められた。ネタヌヤフー蔵相もシャス党に国民投票の賛成への指示を出すようにオバデア・ヨセフに依頼したひとりである。それは、自らが示した予算案の否決をもくろむ行為であり、シャロン政権崩壊後の党首の席を狙っているものだと批判がエフード・オルマート副首相からも出された。

混沌とした状況の中で国会投票がなされ、反対72、賛成39で撤退案の国民投票実施案は否決された。これで、シャロン首相は一つの大きな山を越えたことになる。後は3月31日木曜日の予算案の投票の行方次第で解散総選挙となるか、この夏の撤退案の実施に動き出すかが決定される。